

【原文】

故奴婢賢者得為善人、善人好學得成賢人。賢人好學不止、次聖人。聖人學不止、知天道門戸、入道不止、成不死之事、更仙。仙不止入真、成真不止入神、神不止乃與皇天同形。故上神人舍於北極紫宮中也、與天上帝同象也、名天心神、神而不止、乃復踰天而上、但承委氣、有音聲教化而無形、上屬天上、憂天上事。神人已下、共憂天地間六合內、共調和無使病苦也。

【訓読】

故に奴婢の賢なる者は善人と為るを得、善人の学を好むは賢人と成るを得。賢人、学を好みて止まざれば、聖人に次る。聖人の学びて止まざれば、天道の門戸を知り、道に入りて止まざれば、不死の事を成し、更に仙なり。仙、止まざれば真に入り、真と成りて止まざれば神に入る。神、止まざれば乃ち皇天と形を同じくす。故に上つた神人は北極紫宮中に舍すなり、天の上帝と象を同じくするなり、天心の神と名づく。神にして止まざれば、乃ち復た天を踰えて上り、但だ委氣を承け、音聲もて教化する有るも形無く、上つた天上に属し、天上の事を憂うるのみ。神人已下は、共に天地の間、六合の内を憂い、共に調和して病苦せしむること無きなり。

【翻訳】

このため奴婢の賢者は善人となることができ、善人の道を学ぶことを好む者は賢人となることができる。賢人が道を学ぶことを好んで止まらなければ、聖人に至る。聖人が道を学んで止まらなければ、天道の門戸を知る（道人となる）。入道し止まらなければ、不死の事を成就してさらに仙となる。仙が止まらなければ、眞の境位に入り、真人が止まらなければ、神の境位に入り、神人が止まることなければ、皇天とその形が同じくなる。故に上の方、神人は北極の紫宮の中にやどり、天の上帝と象を同じくし、天心の神と名付けられる。神人として止まらなければ、そこでまた天界を超えて上り、ただ委氣を受けつき（氣に委ねる神人の在り方にのっとり）、音聲があつて教化するが、身体はない。上方で天上に属し、天上の事を憂慮するのである。神人以下は、共に天地の間、上下四方の内部を憂慮し、みな調和して病で苦しむことがないようにする。

【参照】

・『太平経』卷四〇・分解本末法第五三「今善師学人也、迺使下愚賤之人成善人、善善而不止、更賢。賢而不止、迺得次聖。聖而不止、迺得深知真道。守道而不止、迺得仙不死。仙而不止、迺得成真。真而不止、迺得成神。神而不止、迺得与天比其德。天比不止、迺得与元氣比其德。元氣迺包裹天地八方、莫不受其氣而生」。

・『太平経鈔』卷四一一四葉裏、前出…「賢者好道、故次聖。賢者入真道、故次仙。知能仙者必真、故次真。知真者必致神。神者、上与天同形合理、故天稱神、能使神也。神也者、

皇天之吏也。神人者、皇天第一心也。」

・『正一法文太上外籙儀』「太平經云、奴婢順從君主、学善能賢、免爲善人良民、良民善人学不止成賢人、賢人学不止成聖人、聖人学不止成道人、道人学不止成仙人、仙人学不止成真人、真人学不止成大神人、大神人学不止成委炁神人」。

○奴婢賢者得為善人

・『後漢書』卷四 殤帝紀「貪苛慘毒，延及平民」、李賢注「平民謂善人也。書曰、「延〔及〕于平人」。

・『晉書』卷六〇 繆播傳「東海王 越遂害之（繆播）。朝野憤惋、咸曰、善人、國之紀也、而加虐焉、其能終乎」。

○天道門戶

・『太平經』卷六五・斷金兵法第九九「門戶者、迺天地氣所以初生、凡物所出入也。是故東南、極陽也、極陽而生陰、故東南為地戶也。西北者為極陰、陰極生陽、故為天門」。

・『太平經』卷六八・戒六子訣第一〇四「夫天生人、悉以真道付之物具。故在師開之導之学之、則可使無不知也。不闔其門戶、雖受天真道、無一知也。」

○成真不止入神

・『周易』繫辭下「精義入神、以致用也」。孔穎達疏…「言聖人用精粹微妙之義、入於神化、寂然不動、乃能致其所用」。

○北極紫宮

・『史記』卷二七 天官書第五「中宮天極星（北極）、其一明者、太一常居也。旁三星三公、或曰子屬。後句四星、末大星正妃、余三星後宮之屬也。環之匡衛十二星、藩臣。皆曰紫宮」
・『太平經』卷四〇・樂生得天心法第五四「一言之、然吾統迺繫於地、命屬崑崙。今天師命迺在天・北極紫宮」。

○（神人）名天心神

前出…『太平經鈔』卷四—一四紙裏「神人者皇天第一心也」

○踰天而上

『六臣註文選』卷三五 西晉・張協「七命」爾乃踰天垠、越地隔、過汗漫之所不遊、躡章亥之所未跡」、呂向注「垠畔、隔界也」、李善注「淮南子、若土曰、吾與汗漫期於九垓之上、若土舉臂竦身、而遂入雲中。又曰、禹乃使大章步自東極至於西極二億三萬三千五百里七十步、使豎亥步自北極至南極二億三萬三千五百七十里」

○但承委氣

「委氣」↓前出、『太平經鈔』卷三一六紙裏

○有音声教化而無形

『太平經鈔』卷四「不自聞、音声洞徹、上下法則、各不失期」。

『太平經』卷一一·大聖上章訣第一八〇「天上之事、音声遙相聞、安得有隱也。（中略）心神在人腹中、与天遙相見、音声相聞、安得不知人民善惡乎」。

『太平經』卷一一·有心之人積行補真訣第一八四「自惟本素無舛之人也、如自發中思慕、常在不害之命全身、前貪其光耀、上及無精無形之音声、洞達太上奉使進、不敢忘有解而妨大化」。

『太平經』卷一一·大功益年書出歲月戒第一七九「惟上古聖人之為道也、乃出自然。心知天上之治、所施行皆豫知者。音声徹通、還知形容、自視心昭然意解」。

「無形」↓前出、『太平經鈔』卷三一六紙裏「無形委氣之神人」

○共憂天地間六合內

·『莊子』內篇·齊物論（『南華真經註疏』）「六合之外、聖人存而不論。六合之內、聖人論而不議」唐成玄英疏「六合者、謂天地四方也」。

○共調和無使病苦也

·『太平經』卷四二·九天消先王災法第五六「氣得、則此九人俱守道、承負萬世先王之災悉消去矣。此人俱失其所、承負之害日增。此九人上極無形、下極奴婢、各調一氣、而九氣陰陽調。（中略）然此得道去者、雖不為人目下之用、皆共調和陰陽氣也。」

·『太平經』卷四七 上善臣子弟子為君父師得仙方訣第六三「今世多下愚之人、自信愚心、不復信人言也、過在此毀敗天道、使帝王愁苦者、正起此下愚之士、反多妒真道善德、言其不肖而信其不仁之心、天病苦之」。

【原文】

願聞絶洞彌遠六極天地之間、何者最善。三萬六千天地之間、壽最為善。故天第一、地次之、神人次之、真人次之、仙人次之、道人次之、聖人次之、賢人次之。此八者、皆与皇天心相得、与其同意并力、是皆天人也、天之所欲仕也。天内各以職署之、故思慮常相似也、是天所愛養人也。天者、大貪壽常生也、仙人亦貪壽、亦貪生。貪生者不敢為非、各為身計之。

【訓読】

願わくは聞かん、絶洞彌遠の六極天地之間、何者か最も善ならんと。三萬六千天地の間、壽、最も善なり。故に天は第一、地これに次ぎ、神人これに次ぎ、真人はこれに次ぎ、仙人はこれに次ぎ、道人はこれに次ぎ、聖人はこれに次ぎ、賢人はこれに次ぐ。此の八者、皆な皇天の心と相い得、其れと意を同じくして力を并わす、是れ皆な天人なり、天の仕えせしめんと欲する所なり。天内に各おの職を以てこれを署す。故に思慮は常に相い似るなり。是れ天の愛養する所の人なり。天は大いに壽を貪り常に生ず。仙人も亦た壽を貪り、亦た生を貪る。生を貪る者は敢えて非を為さず、各おの身の為にこれを計れ。

【翻訳】

願わくはお聞きしたいのです。宇宙の果て遙か彼方、上下四方、天地の間で、何が最も善でしょうか。三萬六千の天地の間で、寿命が最も善である。そのため天は第一、地はその次、神人はその次、真人はその次、仙人はその次、道人はその次、聖人はその次、賢人はその次である。この(天、地、神人、真人、仙人、道人、聖人、賢人の)八者は、みな皇天の心と通じ、気持ちを一つにして力をあわせており、これは皆な天人であり、天が登用したい人である。天の内部にそれぞれ職を設けてこれを任命している、このためその思慮は常に似ており、これは天の愛おしみ養う人たちである。天は壽命をむさぼり常に物を生み出す。仙人もまた壽命をむさぼりまた生をむさぼる。生をむさぼる者はあえて非を行おうとはせず、それぞれ我が身のためにこのことに心配りせよ。

○絶洞彌遠

- ・『太平経』卷四九・急学真法第六六「然、夫為善者、乃事合天心、不逆人意、名為善。善者、乃絶洞無上、与道同稱。天之所愛、地之所養、帝王所當急、仕人君所當与同心並力也」。
- ・『太平経』卷六八・戒六子訣第一〇四「夫道迺洞、無上無下、無表無裏、守其和氣、名為神」
- ・『太平経』卷七一 致善除邪令人受道戒文第一〇八「精神消亡、身即死矣。夫虛無絶洞之道、常欲使人好生而惡殺、閉口無洩、迺可萬萬歲也」。「夫天地不深知絶洞之道、以何為神乎。以何為壽乎」。
- ・『文選』卷一四・班固「幽通賦」「靖潛處以永思兮、經日月而彌遠」。李善注引曹大家「言己安靜長思、不欲毀絶先人之功跡、日月不居、忽復大遠」。
- ・『道德真經註』卷三「不出戶、知天下。不窺牖、見天道。其出彌遠、其知彌少」。王弼註「無在於一而求之於衆也、道視之不可見、聽之不可聞、搏之不可得、如其知之、不須出戶、若其不知、出愈遠愈迷也」。・宋洪兴祖注
- ・『楚辞補注』卷一五「九懷・危俊」

晞白日兮皎皎，（天精光明而照察也。晞，一作晞。皎，一作皎。）彌遠路兮悠悠。（周望八極，究地外也。）

·『太平經』卷四二·驗道真偽訣第五七「自行此道之後，承負久故彌遠，積厄結氣，并災委毒誠多，不可須臾而盡也」。

○六極天地 六極↓前出、『太平經鈔』卷二、卷四

○三萬六千天地之間

·『淮南子』卷三 天文訓「假使視日出，入前表中一寸，是寸得一里也，一里積萬八千寸，得從此東萬八千里。視日方入，入前表半寸，則半寸得一里，半寸而除一里，積寸得三萬六千里，除則從此西里數也。並之東西里數也」。

·『靈寶無量度人上品妙經』卷四五·解禳山谷瘴癘品「於是元始凝眸垂盼，遐覽国土，緩振玉音，徧告大衆，混黃立極，萬象同生。故有三萬六千天地，三萬六千日月，又有大三千世界，中三千世界，小三千世界。一一世界，各有種類，以分族緒。三萬六千山谷，處諸世界。次二萬三千山谷，一萬二千山谷，一千二百山谷，三百六十山谷，以爲天地世界」。

·『元始上真衆仙記』「真書曰，昔二儀未分，溟津鴻濛，未有成形，天地日月未具，狀如雞子，混沌玄黃。已有盤古真人天地之精，自號元始天王，遊乎其中。溟滓經四劫，天形如巨蓋，上無所係，下無所根，天地之外，遼屬無端，玄玄太空，無響無聲，元氣浩浩，如水之形，下無山嶽，上無列星。積氣堅剛，大柔服結，天地浮其中，展轉無方，若無此氣，天地不生。天者如龍旋迴雲中。復經四劫，二儀始分，相去三萬六千里，崖石出血成水，水生元蟲，元蟲生瀆牽，瀆牽生剛須，剛須生龍。元始天王在天中心之上，名曰玉京山，山中宮殿，並金玉飾之，常仰吸天氣，俯飲地泉」。

○壽最為善

·『太平經鈔』卷二「解承負訣，天地開闢已來，凶氣不絕，絕者而後復起，何也。夫壽命天之重寶也。所以私有德，不可偽致。欲知其寶，乃天地六合八遠萬物，都得無所冤結，悉大喜，乃得增壽也。」。

·『太平經鈔』卷二「守一明之法長壽之根也（略）守一明之法，明有日出之光，日中之明，此第一善得天之壽也」。

·『太平經鈔』卷九「第一善者莫若樂生，其次善者樂養，其次善者樂施。故生者象天，養者象地，施者象仁，此三者天地人之大綱也」。

·『太平經鈔』卷五「故壽者長生，与天同精。孝者下承順其上，与地同声」。

○同意并力

·『太平經』卷四九 急学真法第六六「故天行者与四時并力，天行氣，四時亦行氣，相与同心，（略）地者与五行同心并力，共養凡物，未當終死，（略）聖賢与仁同心并力，故游居常尊道而貴德，倚附仁而處」。

·『太平經』卷九六·守一入室知神戒第一五二「神、真、仙、道、聖、賢、凡民、奴、婢、此九人有真信忠誠，有善真道樂，來為德君輔者，悉問其能而仕之，慎無署非其職也，亦無逆去之也。（中略）九人各得其所，當共安天地，天下并力同心為一也」。

○是皆天人

「天人」↓前出、『太平經鈔』卷二

○以職署之

· 『太平經』卷七一· 致善除邪令人受道戒文第一〇八「六人生各自有命、一為神人、二為真人、三為仙人、四為道人、五為聖人、六為賢人、此皆助天治也。神人主天、真人主地、仙人主風雨、道人主教化吉凶、聖人主治百姓、賢人輔助聖人、理萬民錄也、給助六合之不足也」。

· 『太平經』卷九六· 守入室知神戒第一五二「凡此九人。神、真、仙、道、聖、賢、凡民、奴、婢、此九人有真信忠誠、有善真道樂、來為德君輔者、悉問其能而仕之、慎無署非其職也、亦無逆去之也。(略)。得守一得道得神、必上能為帝王德君良臣。臣者、必當助帝王德君、共安天地六方八洞、得其意、乃國可長安也。(略)必當群賢上士出、共輔帝王、為其聰明股肱、故次之以仕臣九人。「九人各得其所、當共安天地、天下并力同心為一也。必常相与常通語言、相報善惡、故次之以三道行書也」。

· 『太平經鈔』卷一「<後聖李君太師、後聖李君上相方諸宮青童君、後聖李君上保太丹宮南極元君、後聖李君上傳白山宮太素真君、後聖李君上宰西城宮總真王君> 右五人、一師四輔。(略)其餘公卿·有司·仙真·聖品·大夫官等三百六十一、從屬三萬六千人、部領三十六萬、人民則十百千萬億倍也」。

○天所愛養人

· 『太平經』卷四五· 起土出書訣第六一「地者、萬物之母也、樂愛養之、不知其重也、比若人有胞中之子」。

· 『太平經』卷四九 急学真法第六十六「夫為善者、乃事合天心、不逆人意、名為善。善者、乃絕洞無上、与道同稱。天之所愛、地之所養、帝王所當急、仕人君所當与同心并力也」。

· 『老子河上公注』任成第三十四「大道汎兮、(略)愛養萬物而不為主」。注「道雖愛養萬物、不如人主有所收取」。

○貪壽常生

· 『太平經』卷一一· 有心之人積行補真訣第一八四「今生見是前行之事、益復改正易節、開心相留耳。欲開音声、善聞貪壽惜年、以是不敢解息、唯大神省其不及」。

· 『般泥洹經』卷下「佛報言、吾本已說、世間非真、無可樂者、凡人貪壽、思戀五欲、惑而無利、但增生死、更苦無量」。

· 『太平經鈔』卷五 闕題「天為常、無急名利、道自行。天道常生無有喪」。

○貪生者不敢為非

· 『淮南鴻烈解』卷二〇汎論訓下「楚人有乘船而遇大風者、波至而自投於水、非不貪生、而畏死也、或於恐死而反忘生也」。

· 『老子』小国寡民章「使民重死」。河上公注「君能為民興利除害、各得其所、則民重死而貪生也」。

· 『太平經』卷七「夫貪生者天之所祐、貪養者地之所助、貪仁者人共愛之。為惡者天之所賊、天知其惡、使凶神惡鬼入身中」

· 『太平經』卷一一 大功益年書出歲月戒第一七九「天生人知善惡、行善有信、天不欲令人有惡聞也。用是欲貪生惡死、亦不敢犯禁、如所妨害於身也」。

○各為身計之

· 『太平經』卷四五· 起土出書訣第六一「從今以往、欲樂富壽而無有病者、思此書言、著之胸心、各為身計」。

· 『太平經』卷九三· 國不可勝數訣第一三九「吾所以說而不止者、吾亦為吾身屈、非而為子也。凡六極之表裏、擾擾之屬、俱各為其身計、不能為他人也」。